

編集後記

お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報『ジェンダー研究』第8号が無事に刊行の運びとなった。執筆者をはじめ、査読者の方々や、編集・発行にご協力を頂いた多くの皆様に心より御礼を申し上げます。

本号にご寄稿下さったのは、2004（平成16）年度前半にジェンダー研究センターへ海外から客員教授として赴任された前みち子教授（デュッセルドルフ大学）とローダ・ケスラー・アンガー教授（ブランダイス大学）である。お二人とも短いご滞在期間であったが、公開講演会、夜間セミナーにおいて、それぞれ興味深いご講義を頂いた。前教授は、ドイツ高等教育におけるインターネットを活用したジェンダー研究活動の試みをご紹介された。またアンガー教授は、実証心理学にジェンダーの視点を導入した先駆者として、フェミニスト心理学についてご講義された。これらの寄稿論文が、ご参加下さった方々にとっては、そこでの熱のこもった議論を想起する機会となり、また惜しくも参加がかなわなかった方々には、前教授とアンガー教授のご研究やこれらの分野における動向についての知見を深める機会となれば幸いである。

投稿論文には多くの申し込みを頂いた結果、大学院生を中心として5本が掲載された。どの論文もジェンダー研究という視座から、それぞれの研究分野において高い問題意識を提示する力作である。このような若手研究者の意欲的な研究を紹介する仕事に関わることができ、とても嬉しく思う。

2本が掲載された研究ノートにおいても、今後の研究の展開が期待されるテーマが取り上げられている。

研究プロジェクト報告は、ジェンダー研究と情報という領域横断的な共同研究が学内で行われ、また積極的に海外の研究機関にもアプローチしている様子を紹介している。

書評欄では心理学、社会福祉、服飾史におけるジェンダー研究の最新の学術書3冊が、学外も含めた研究者により書評されている。特にアンガー教授が編纂された『女性とジェンダーの心理学のハンドブック』の邦訳出版という時機をとらえられたことは喜ばしい。

何はともあれ、国立大学独立法人化後、初めての年報を刊行までこぎつけることができた。様々な形で多くの方々に支えられての年報の発行であるが、中でも、昨年度から引き続き校正をお手伝い下さったお二人の校正者には感謝の念に絶えない。

第7号に引き続き『ジェンダー研究』編集事務局を担当し、あらためて年報の意義を実感している。『ジェンダー研究』が、ジェンダー研究のみならず社会の不正義・抑圧の克服に今後も多大に貢献していくことを祈念したい。

編集事務局 秋林こずえ（研究機関研究員）